

講義録

文学とジェンダー 知ることと感ずること

飯田 祐子

Literature and Gender: Knowing and Feeling

IIDA Yuko

知ることと感ずること

「みんなで考えよう、女性学の未来」という本日の大きなテーマの中で、日本文学研究の立場から、小説を紹介しながら話してみたいと思います。副題は「知ることと感ずること」としました。知ることと感ずることが重なればよいのという願いをもちつつ、それがなかなか難しいことなども含めて話したいと思います。

日本におけるジェンダー不平等の現実といえば、ジェンダーギャップ指数が145カ国のうち101位という繰り返し引用される数字があります¹⁾。日本にジェンダー不平等があることははっきりしているし、その事実はおおむね知られているはずですが。また最近では「女性活躍」という用語がありますが、女性の中には非常に大きな格差が生じていて、活躍できない、あるいは活躍どころじゃない女性がたくさんいるということも、非正規雇用者の増加やシングルマザーの貧困などを具体的な例としてよく語られていると思います。女性活躍と言ったときの女性とは誰なのかという問題です。経済的効率が基準になるとき、視野の外に追いやられる層があるわけです。

こうしてジェンダー格差や女性の中での格差が指摘されているのにもかかわらず、実感の方はどうでしょうか。学生に話しをしたときに、変わっていつている所と変わっていない所がまだらになっていて一口で全体状況を語ることが難しくなっていることや、貧困などジェンダーだけでは解決できない問題がより強く感じられるせい、反応が鈍くなっているという感触を私も持っています。ジェンダーを原因とした不平等が確かにあるということ、それを知ることと、知った後にその痛みに共感したり、変えていこうと感じたりすることとは、簡単には繋がっていないようです。ですので、森永先生の、「人々はなぜジェンダー格差を受け入れているのか」という問いをたてられるに至ったというお話も、深くうなずきながらうかがいました。

知ることと感ずることとの繋がりを場合分けしてみると、まずは知っていることあるいは新しく知ることが、たしかにそうだという共感に繋がる場合があります。ジェンダーによる不平等があると分かることや、何が起きているの

かを知ることによって自由になったと感じたり、不平等があることは無くすべきだという怒りを覚えたり、だからこそフェミニズムや女性学は必要だと感じられたりする場合があります。最初は全然知らなかったとしても、授業などで話を聞いて本で読んで目からうろこが落ちる人がいます。自分が女性学に出会ったときのことを考えてみても、初めて読んだり聞いたりしたときに、そうだったんだと、今までぼんやり思ってきた疑問に急にはっきり輪郭ができていくような瞬間があったわけで、そういう意味では、既に知っているか未だ知らないのかということとはそれほど重要ではないのかもしれませんが。知らない人の中にも、知れば共感を持ちうる人が潜在しています。伝えることには、そうした潜在的な共感者を掘り出す意味があります。

一方で、知っていても距離をとる人もいます。知っていても遠い、知っても通り過ぎるという場合があります。問題があることを知ったからといって、必ずしも共感するわけではないわけです。いろいろな状況があり得ます。自分の問題として実感されない場合は、なるほどなと、そういうことあるんだなと思っても対岸の火事です。私は関係ないわとなる。また、知った事実と自分の状況を比較して、幸せの範囲を小さくしていけば、これで十分幸せなんだと自分で問題を自己回収することも十分可能です。あるいは指摘された問題を経験していたとしても、繰り返しひどい状況を経ていると、それに対して感情を抱くことができなくなっていきます。反論する気力そのものが奪われていくからです。問題が常態化していくと、むしろ何か変化が起きると不幸が拡大するんじゃないかという不安も生じる。そうすると知ることは、共感には繋がりません。あるいは、もっと状況が深刻な場合は、知ったところでそれどころではないということだってあると思います。そんな問題にかかわる余裕はないから、知ってるけれども遠くならざるを得ないわけです。

さてそれから、関心を持たない場合、知ることへの抵抗がある場合もあります。気づくことが恐ろしい、苦しくなるからできるだけ気づきたくないという場合があります。自分の今ある状況を変えたくない時には、多くの場合、そうなるでしょう。知りたくないから無関心になる。恵まれた状況にある場合、加害者に

近い側、抑圧している側にいる場合、マジョリティの側にいる場合は、突き上げを食らうのは恐ろしいから、罪悪感を持つのは苦しいから、知りたくない。知ることに対する抵抗が大きくなるだろうと思います。知らないという状態をそのまま維持したいと強く思うことになるでしょう。知った後、変わっていかばよいという道筋をどのように用意していくか。知ることによるしんどさを、次の場所へ開いていく出口が必要です。

そして知っていて、だからこそ反感を持つ場合もあります。知ればみんな変わるわけではもちろんないわけで、もともと持っている正義とフェミニズムが提示する世界観がずれていたら、知れば知るほど反発していきます。いわゆるバックラッシュなどは、何も知らないというのではなくて、若干は知っていることの中から起こるわけです。若干知って、それが反感を大きくしていくことになります。伝えること、伝わることがつながりを生むことにはならない。

つらつら並べてきましたが、知ることと感じることの間にはいろんな場合がある。必ずしもフェミニズムに親和的ではない学生にも、もちろん出会ってきました。そういう学生にどういうふうにしたら言葉が届くのか、なかなかその答えは見つかりません。知ることが感じることに繋がらないことがある。全ての人に届く言葉はないということを出発点にして、フェミニズムの言葉が届かない場、共感が生まれにくい場について、考えてみたいと思います。

正義の複数性—又吉直樹『火花』

さて、ここで小説を一つ紹介しながら、現在におけるジェンダーやセクシュアリティの語られ方について具体的に考えてみたいと思います。

今日は、二〇一五年上半期の芥川賞をとった又吉直樹の『火花』（文藝春秋、2015）を選びました。大きな話題となり、二〇一五年度は二〇〇万部を超えて売上一位になりました。この小説の中には、ジェンダーとセクシュアリティにかかわる事柄が出てきます。それがどのように挟み込まれているのか、確かめてみたいと思います。

『火花』では徳永という芸人が語り手かつ視点人物になっていて、神谷さん

という徳永が師匠として慕うお笑いの先輩との関係が語られています。二人がずっとつるみながら笑いについて考えていく、どうやったらおもしろい漫才ができるのかということを考え続ける毎日が描かれています。

神谷は、徳永にとって一本筋の通った笑いに対する正義を持っている男で、周囲に振り回されずに自分の笑いを追求している男です。神谷は「唯一の方法は阿呆になってな、感覚に正直におもしろいかどうかだけで判断したらいいねん。他の奴の意見に左右されずに」と言います。「他の奴の意見に左右されずに」という一言は、神谷という男のあり方を端的に示しています。そういうふうにして自分だけのおもしろさを追求していくことが大切で、少々とっぴであったり、時に暴力的であったりしても、それによってこそ何か破格のおもしろさが生まれてくるんだということを信条にしている男なわけです。

周りに迎合しない神谷のあり方を徳永は突き抜けたおもしろさとして支持しています。しかし神谷は結局売れません。徳永という男も漫才をやめることになり、神谷は行方知れずになります。そして小説の最後で、一年たってしばらくぶりに神谷から連絡があり二人が出会うことになります。会ってみると、神谷はシリコンを入れて立派な乳房をつくってしまっている。神谷は、自分ではすごくおもしろいと思ってそうしたんですが、「お乳入れた時な、自分でめっちゃ面白くてな、一人でずっと笑ってん。でもな、唯一仲良かった社員に会いに行つてな、これでテレビ出たいって言うたら、めっちゃ引いてな、ほんでおれも急に恐くなって来て」と言います。自分では大笑いしたのだけれども、ほかの人に見せたら全然笑ってくれない。テレビに出られるんじゃないかと思ったけれど、それどころではない。「急に怖くなって来て」、「徳永やったら笑ってくれると思って」会いに来るわけです。おまえ見てくれと、徳永やったらわかるんじゃないか、この笑いが。あるいは自分の考えてることが、おかしいかどうかわかるんじゃないかと確かめに来るわけです。

そうすると、徳永が言うわけです。「『神谷さん、あのね、神谷さんはね、何も悪くないと思います。ずっと一緒にいたから僕はそれを知ってます。神谷さんは、おっさんが巨乳やったら面白いぐらいの感覚やったと思うんです。でも

ね、世の中にはね、性の問題とか社会の中でのジェンダーの問題で悩んでる人がたくさんいてはるんです。そういう人が、その状態の神谷さん見たらどう思います?』僕は自分の口から出た、真っ当すぎる言葉に自分で驚いた」。さらに「神谷さんに差別的な意識が一切ないのはわかってます。男が巨乳やったら面白いという発想と、性別を馬鹿にすることとは全然違うんです。そんなんわかってます。でも一緒やと思われちゃいますよ。もしくは同質の不快感を与えてしまうんです。僕たちが情報として持っているのか、潜在的な嫌悪があるのかわからへんけど、そういう僕達の中の微妙な差別意識と結びついて、神谷さんの行為は許されへんもんになるんです」と語る。

つまり非常にポリティカルにコレクトなことを徳永は言います。そう言われて、神谷はすごくしゅんとしてしまう。ここが小説の山場です。今までずっと人の言うことなど聞かないというやり方で笑いを追求してきて、はみ出してるけれど、むしろはみ出しているからこそ笑いに命をささげている男であり得た神谷が、全く別の正義があることを徳永にぶつけられて、小さくなってしまいます。どうしたらいいのかわからなくなって、非常にやるせない感じになって、それでも笑いのことばかり口にする神谷を見守るようにして小説は終わります。別の正義があるということが示されたところで、その後の展開はなく小説が閉じられています。

こういう「真っ当すぎる言葉」として出てくる、徳永の言葉を私たちはどういうふうにして読んだらいいのか。乳房をつくるという話は、ジェンダーとセクシュアリティ、両方のことにかかわっているわけですが、この問題がこの小説の中では、逸脱として提示された差異が差別に転換するという出来事のわかりやすい例、ステレオタイプとして出てきています。

つまりここでは、ジェンダーやセクシュアリティに関わる問題が、ある種のややこしい正しさとして認識され、物語を成立させています。なるほど、こういうややこしさってあるなと読者が受け取るんだと思います。そう言われたら正しいと言わざるを得ない、笑いとは抵触するような別種の抵抗しにくい正しさとして出てくる。ややこしさをはらんだ正義、笑いからずれた正義として提示

されています。

この正義は、神谷のいるこちら側の正義にぶつかってくる正義です。徳永という男自身の正義は単純では実はないと思われるところがあるんですが、最後のやりとりでは神谷さんはわかってないけれども「そういう人」がいるという、どこかにいる他者の存在を導き出してくる形で、ジェンダーやセクシュアリティに関わる正義が書かれています。だから唐突で、取ってつけたような感じもします。

芥川賞の選評で高樹のぶ子は、「優れたところは他の選者に譲る。私が最後まで×を付けたのは、破天荒で世界をひっくり返す言葉で支えられた神谷の魅力が、後半、言葉とは無縁の豊胸手術に墮し、それと共に本作の魅力も萎んだせいだ」と言っています。「萎む」というのが去勢に繋がるような印象を与える評でもあります。神谷のことをおもしろいと思った読者であればあるほど、最後の転換における笑いの正義からの逸脱についていけないわけです。

さて、ジェンダーとセクシュアリティがこうしてステレオタイプ化した他者の正義として語られているのですが、徳永という男がそれを向こう側の正義として、自分と関係ない問題としていたかということ、実はそうでもないと思われる箇所があります。読み返してみると、ここに至るまでも、少しずつ神谷とのずれの問題が出てきていることに気づきます。例えば、自分と神谷を比べたところでは次のように言っています。「僕と神谷さんでは表現の幅に大きな差があった。神谷さんは面白いことのためなら暴力的な発言も性的な発言も辞さない覚悟を持っていた。一方、僕は自分の発言が誤解を招き誰かを傷つけてしまうことを恐れていた／神谷さんに、そんな制限はない」。

「誰か」が、自分の発言を別な角度から見られるかもしれない。僕には、あちら側の正義に対する敏感さがあります。正義が複数化しています。こういう感覚は、ジェンダーやセクシュアリティの問題に絡んで、他にも示されています。神谷は「下ネタ」が平気な男として出てきます。そもそも最初に二人が知り合った花火会場での舞台でも、花火に夢中で漫才を無視する通行人に神谷は指を突きつけ、靈感があるから「人が天国に行くのか地獄に行くのかわかるの」

と女言葉で語った後「地獄、地獄、地獄」と一人一人に宣告して行くシーンがありますが、徳永が神谷に向けた最初の問いは、舞台後の飲み屋での「なぜ女言葉で叫んでいたのか」というものです。神谷は「その方が新鮮やろ、必然性なんかいらんねん。じゃあ、女言葉を使ったらあかん理由はなんやねん？」と答えています。神谷は、たぐり寄せられてしまうであろうジェンダーやセクシュアリティの問題を全く無視して、破壊的な逸脱を単にわかりやすく示すために「女言葉」を使う男として出てきます。人物像として一貫しています。

徳永という人は、そこに問いを発しながらもおもしろいと思ってついていきますが、自分との差異は埋まらず、それが小説の最終部分で「不愉快」に思う人がいるということを言わざるを得なくなっていくことにつながっています。

徳永は神谷とは逆に「下ネタ」嫌いとして書かれています。「神谷さんとは対照的に、僕は主題が他にあり、下ネタがただの一要素に過ぎない局面でも、それを排除する傾向にあった」とはっきり示されています。この部分は二人の差異として語られており、「下ネタを避ける時、僕は面白い人間でいようとする意識よりも、せこくない人間であろうとする意識の方が勝っているのだ」と解説しています。神谷はその部分を「不良だ」と言うので、「だからこそ、神谷さんの前でだけは僕も淫猥な表現を用いることに抵抗が少なかった」と説明されています。ということは、もともとこうして正義が一つではないということは、挟みこまれていたわけです。

この部分は、ある種の男性性へのひっかけりのようなものとしても読めないわけではありません。例えばこんなエピソードがあります。神谷が、同居していた真樹という女性と別れることになり荷物を取りに行く場面で、怖いし悲しいのも惨めなのも嫌だからと、徳永に「勃起しといて欲しいねん。感情的にやばくなったら、お前の股間見るわ」「先輩の大変な時に、こいつ勃起してるやん。と思えたら笑えるし、平常心保てるから」と頼みます。徳永は「しませんよ。このタイミングで言うのもあれですけど、僕あんまり下ネタ好きじゃないですからね」と一旦は断るものの、裸の画像をスマホに用意したりして何とかちょっと「股間」を奮い立たせ、それを見た神谷が吹き出してしんどい場面を

切り抜けるというエピソードです。

性的なことをおもしろいことや逸脱として用いていく、政治性には全く無関心に「下ネタ」を使っていく神谷という男がいて、それに巻き込まれる徳永は、彼と同じようには振る舞えないのだけれど自分なりに何とか折り合っている。そんな男同士の関係が書かれているわけなので、ある種の男性性へのひっかかりとか、ホモソーシャルティへの違和感が書き込まれていると読めるわけです。

とはいえ、この小説をジェンダーセンシティブな小説として読むことも難しいのではないかと思います。というのは、最後まで、そういうことを「不愉快」に思う人がいるという向こう側の正義の形でしか語られないからです。語り手が示す「幸せ」は、異性愛的家族を中心とした道徳的なものです。たとえば、後日談として、別れた真樹が「幸せ」になっている様子が挿入されています。十年後に垣間見た光景として物語の時間的振幅から大きくずれて挿入されているシーンで、真樹は男の子と手をつなぎ「圧倒的な笑顔を、皆を幸せにする笑顔を浮かべていて、本当に美しかった」とあります。異性愛的な家族を持つのが「幸せ」なのだという、異性愛的家族幻想がはっきりと全く疑われずに描かれています。また、徳永がコンビを解消していく理由も、相方が同棲相手に子供が出来て籍を入れたからとされています。「生まれてくる子供のために」ということが決定的な理由となるという、異性愛的家族幻想がまたしても強く出ています。「幸せ」の形はさわめて単一的で強固です。そして豊胸手術をした神谷という男は、そうした家族のルールから逸脱した存在であり、「後悔してる。ほんま、ごめん」とむせび泣くことになる。乳房のある男性が抱えるだろう問題が神谷によって具体的に省みられることはありません。最後に神谷と徳永が見る花火では、アナウンスされた「結婚しよう」というメッセージに観客が寄せた万雷の拍手と歓声に二人で加わり、神谷は「これが、人間やで」とつぶやきます。差別の存在が指摘されてはいても、乳房のある男性に向けられた視線のあり方を変える契機は、『火花』にはない。徳永の違和感も、意味を持たされることがありません。その意味で、ジェンダー・センシティブな小説と

言うことは難しいと思います。

私が今日、この小説を紹介しようと思ったのは、ジェンダーやセクシュアリティの問題が、このようにして、ある種のステレオタイプとして消費されているということを確認できると思ったからです。差異が差別に転じるということを示すわかりやすい問題として小説の中に入ってきている。こういう正義はあるよねと、ややこしいよねというように、向こう側の問題として配置されることで、結局は中心の文脈から遠ざけるようにして語られてしまっているという問題です。知られていても共感に繋がらない、その構造が垣間見えるのではないかと思います。

家族というトリガー

『火花』は、ジェンダーやセクシュアリティに関わる正しさを笑いの正義に対立させる一方で、笑いの正義をも含みこむものとして、結婚や家族を「幸せ」な光景として掲げています。「家族」の物語のこの「普遍性」への疑いが全く欠けていることは、ジェンダー・ポリティクスへの切り込みを浅くさせていると思います。

ただし、『火花』において正義が複数化していること自体を無視してはいけないうらうと思います。正義が単一化すると、他者に対してたいへん排他的になるからです。家族イデオロギーと保守性との繋がり、ジェンダーフリー・バッシングを思い出させます。ジェンダーフリー・バッシングにおいては正義が単一化しています。正義が単一化すると、こちらの正義と向こうの正義の差異が対立としてはっきり際立たされ、こちらの正義を守る均質な共同体が作り上げられますし、他者に対して非常に排他的な動きが出てきます。知ることが共感に繋がらないどころか、反発を生むわけで、ジェンダーフリー・バッシングは、その例の一つだといえます。

ジェンダーフリー・バッシングについての研究として、山口智美・斎藤正美・荻上チキ『社会運動の戸惑い フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』（勁草書房、2012）という本があります。この本の最もよく知られてい

る部分は、「ジェンダーフリー」という用語が誤った引用のされ方をしていたという山口さんの指摘です。「ジェンダーフリー」という用語の参照元とされてきたバーバラ・ヒューストンの議論を確かめてみたら、バーバラ・ヒューストンは、ジェンダーフリーを不適切なアプローチとしており、ジェンダーセンシティブの重要性を訴えていたということが指摘されました。ジェンダーフリーを訴えてきた人たち、フェミニストも誤っていたというたいへん重要な指摘ですが、その指摘をした山口智美さんは、この本の中で二つの事例を中心にジェンダーフリー・バッシングをした側の調査をしています。事例の一つは保守的な推進条例として知られている宇部市の男女共同参画推進条例です。男らしさ女らしさを一方的に否定することなくとか、専業主婦を否定することなくという文言が入っているなど、保守的であることで注目されました。もう一つは、千葉県における男女共同参画条例が廃案になったという事例です。この二つの事例について、反対した人たちはどういう人たちなのかという草の根保守運動について聞き取りを重ねた調査がされています。

その草の根保守運動の代表的なものとして挙げられているのは二つあり、一つは『日本時事評論』という山口県にある宗教団体がつくっている雑誌、もう一つが日本会議です。今では日本会議はたいへんよく知られている団体ですが、この時期から二つの団体が強い流れをつくり、ジェンダーフリー・バッシングを行い、フェミニズム批判をしてきたと指摘されています。

山口さんは、運動がどのように始まったのかという点について、具体的な証言を引きだすとともに文献調査をしていますが、そこに共通しているのは、フェミニストによって家族が壊されようとしているという、家族崩壊に対する恐怖があるということです。引用された文献の中から一つを紹介しておけば、「『共参』主義の押し付けはご免だ!! 『男女共同参画』の条例化は疑問! 『家族解体』と『国力衰退』を招く危険性」(『日本時事評論』2000.5.12) という記事があります。『日本時事評論』が反論の最初期に出した記事です。条例の制定を推進する動きを「家庭崩壊の危険性を意に介さない姿勢」として、批判しました。タイトルからは家族解体と国力衰退、二つがセットになって批判さ

れていることがよくわかります。

こうした論理は日本会議が掲げてきたものとはほとんど一緒です。日本会議が目指すものとして、現在の日本会議のホームページに出ている文章の中の一節を引用しておきます。「特に行きすぎた権利偏重の教育、わが国の歴史を悪しざまに断罪する自虐的な歴史教育、ジェンダーフリー教育の横行は、次代をになう子供達のみずみずしい感性をマヒさせ、国への誇りや責任感を奪っています」(「日本会議が目指すもの 4 日本の感性をはぐくむ教育の創造を」日本会議 HP <http://www.nipponkaigi.org/about/mokuteki> 2016.9.29 アクセス)。自虐史観という国家の問題とジェンダーフリー教育という家族の問題が両輪のようにして語られているわけです。

山口さんは、この保守的な草の根保守運動の始まりに、家族が壊れるという危機感があったことを聞き取りの中で引きだしています。家族が壊されると思った瞬間に、突然保守的な動きが過激になる、家族は保守化のトリガーになるということです。

近代家族のイデオロギー—北村透谷・樋口一葉・家庭小説

近代における家族国家主義については、いまさら説明する必要もないかと思えます。国家を守るために家族を守ろうとする。では、守られようとしている家族とはどのようなものでしょうか。近代家族の規範を、千田有紀さんは『日本型近代家族 どこから来てどこへ行くのか』(勁草書房、2011)で三つにまとめています。一つは、ロマンティックラブ・イデオロギー、もう一つは母性イデオロギー、三つ目は家庭イデオロギーです。三つの規範が家族国家主義の内側でよりソフトな規範として機能しているといえます。

文学もこの三つのイデオロギーの成立に大きな役割を果たしてきました。大きな役割という言い過ぎかもしれませんが、少なくとも小説の中には規範が構築されていく過程が、亀裂も含み込みながら書き込まれています。それぞれの歴史性を確認するのにわかりやすい例を、ここでは三つ挙げておきます。北村透谷と樋口一葉と家庭小説です。

北村透谷はよく知られているように「厭世詩家と女性」（『女学雑誌』1892.2.6,20）という評論を書いて、「恋愛は人生の秘鑰なり」と恋愛を持ち上げました。しかしながら、このときの恋愛は結婚と必ずしも結びついていません。発表媒体であった『女学雑誌』には、結婚と愛を結び、家族的な愛を中心にする事で結婚の中に恋愛を埋め込もうとする言説があふれていましたが、透谷がうたった恋愛は、実は結婚と抵触しているので、規範の形成が簡単ではなかったことを示すテキストとして読むことができます。こうして発生した亀裂を修復しながら、恋愛結婚が理念として着地していくのは大正期であり、厨川白村『近代の恋愛観』（改造社、1922）などが恋愛と結婚を結びつけた恋愛結婚を提唱するようになっていきます。理念の輸入から見合い結婚を否定して恋愛結婚をうたい上げた大正期まで、ずいぶん時間がかかっています。

母性イデオロギーについては、樋口一葉の小説の中から「この子」（『日本乃家庭』1896.1）という小説を紹介したいと思います。「この子」は、子を持つ女性の視点で、過去を反省的に語る小説です。結婚後、夫が外のことを話さないことを怒って夫に冷たく当たっていたら夫が道楽者になってしまい、夫との冷たい関係の中で身ごもった子供が生まれたときに、おまえさえ死んでくれたらと思ったということが書かれています。「あゝ何故丈夫で生れて呉れたらう、お前さへ亡つて呉れたなら私は肥立次第實家へ歸つて仕舞ふのに、こんな旦那様のお傍何かに一時も居やしないのに、何故まあ丈夫で生れて呉れたらう」という。子供が生まれたときに、おまえさえ死んでくれたらと母親が思うというのは、現在のように母性愛の神話性が否定されるようになってから見ると、なるほどという感じもしますが、「この子」に語られているのは近代母性イデオロギーの否定ではなく、未だそれが無いということです。母性は、産んだ後に発見されていきます。育てるうちに段々に可愛くなっていく。そして、この子は夫のものではない私のものだと考えるようになる。その延長で、語り手である女性は息子の笑顔を見て笑う夫の笑顔を見て、夫が息子に似ていることを発見します。「高声の大笑ひをし遊ばした其のお顔、此子が面ざしに争はれな

いほど似た処が御座いました」と、夫の笑顔が我が子の笑顔に似ていることを発見する。ならば、憎んでなどいられないと夫に対する気持ちを改めるという話です。面白いのは、父に子供が似ていると考えるのではなく、子供に夫が似ていると考えるという点です。因果関係が全く転倒しています。この転倒した瞬間は、夫が父親に転じた瞬間として読めます。夫としては受け入れることのできなかつた男が父に変化した瞬間が描かれている。そして子供を核とした関係が構成され、夫婦が父と母となることで幸せになりうるというわけです。

この小説には、近代において妻として夫との関係を築くことが困難ななかで、母性愛が発露していない妻であった女性が母に転換する過程が書かれています。妻から母に女が移行していく、その中で夫が父として発見されていくという物語であり、母性イデオロギーの成立を語る小説として読めるでしょう。

さて、最後の家庭イデオロギーについては、家庭小説というジャンルを例としておきます。かつて論じたことですが、明治中期、家庭という領域が生み出されるとともに、家庭小説というジャンルが生み出されました。家庭で読める小説が必要とされた時代があったわけです。家庭に小説が入っていくことは、健全でない娯楽とされていた小説が健全なものとなることを可能にしました。そしてまた同時に家庭にふさわしい理念が小説によって語られたわけです。家族を守る夫・父、貞淑で愛に溢れた妻・母、子どもを中心に愛によって結ばれた家族像。そうした理念を語る小説は、女・子供・紳士が読むものとなり得ました。家庭小説が家庭という領域を道徳的な領域として配置していく過程と文学が自律した価値を得ていく過程は深くかかわっています。

家族の現在を知ることと感ずること

さて、簡単に近代家族のイデオロギーについて復習しましたが、現在における家族の現実は大きく変化、あるいは多様化しています。その現実を家族の変質や崩壊と捉えるとき、多様性を抑圧するイデオロギーに対する批判、フェミニズムや女性学の考え方を知っていても共感しない、知ることでもむしろ保守化する姿勢が生まれるといえます。変化を肯定的に捉えられる場合、あるいは変

化を受け入れている場合には、フェミニズムや女性学・ジェンダー学が提示してきた、多様なあり方を受け入れていこうという発想は受け入れられていくでしょう。ところが変えたくない、すでに変化しているという現実を受け入れずイデオロギーを守りたいと思う人たちにとっては、フェミニズムが敵となります。家族崩壊の犯人としてのフェミニズム。しかしその理解は、やはり間違っています。

さまざまな家族研究を振り返れば、フェミニズムが犯人でないことは明らかです。

現実のすくい取りの中で言われてきたことは、格差が生じていることや、少子化が起こっていることや、出産が高齢化していることや、未婚化が進んでいることや、離婚率が上昇していることや、婚外子出生率が上昇していることなど、いろいろな変化があるということです。家族イデオロギーに、それらの現状は収まりません。

そして、こうした変化はフェミニズムが原因で起こっているわけではありません。最も保守的な立場にある人たちはフェミニズムを敵視しましたが、家族の多様化は経済的な状況や社会構造の変化を主たる要因として起こってきたのであって、フェミニズムやジェンダー分析がしてきたことは、視野から外されていた問題を可視化することです。フェミニズムは、家族を構成するイデオロギーが女性を抑圧していることを指摘しました。またそれは自然なものではなくて歴史性があることを解明しました。家族が比喻として機能し、国家や人種や民族のポリティクスを構成しているという側面なども分析されてきました。現実そのものに関わる側面では、多様化した現状に合わせて新しい法や制度の構築がなされてきました。つまり、女子供の領域とされてきた私領域の現実や問題を拾い出すことをしてきたのであって、破壊の元凶となっているわけではありません。イデオロギーに対する批判は、すでに問題が起きているからなされるのであり、またそれが現実を不可視化するからなされてきたのです。フェミニズムは、存在しているものを壊したのではなく、すでに存在しているのに見えていないものに光をあててきたのだといえます。現実が多様化し変わって

います。そのような現実を知るといことと、感じることの繋がりが切断されるとき、フェミニズムは敵になります。

現代小説の中の家族—村田沙耶香『殺人出産』『消滅世界』『コンビニ人間』

さて、さきほどは近代文学が家族のイデオロギーの成立に関わったことを振り返りましたが、最後に、家族の多様化とそれによる家族イデオロギーの機能不全に応答する小説を紹介しようと思います。二〇一六年上半期の芥川賞を『コンビニ人間』（文藝春秋、2016）でとった村田沙耶香の小説です。『殺人出産』（講談社、2014）と『消滅世界』（河出書房新社、2015）も並べて、ロマンティックラブ・イデオロギーと母性イデオロギーと家庭イデオロギー、先ほど確認したこの3つのイデオロギーが、それぞれに解体されている様を読んでみたいと思います。

『消滅世界』という小説の主人公は雨音という女性です。彼女がいる社会では、「恋と性欲は、たしかに、家の外でする排泄物のようなものだ」と言われています。それゆえ恋や性欲を家族の中に持ち込まないのが道徳となっています。夫も妻も、性欲は外で処理してくるべき、恋も家の中に持ち込むなど生臭くて気持ちが悪いと言われています。二次元のキャラクターへの恋も人との恋も同じようなものとして扱われていますし、マスターベーションと男と女でするセックスも区別ない感覚で描かれていて、いろいろと性に意味を読み込んできた私たちの性規範やロマンティックラブ・イデオロギーが完全に解体された社会が描かれています。

ただし、恋や性欲は「家の外」に出すことができても、家族そのものはなかなか処理の難しい問題として残っています。「家族システムは、便利だから利用している、というだけではなく、そこになにか確固たる絆を生むものなのだ」と肯定されます。また「家族、家族、家族、その呪文を唱えるたびに、私は安心していく。／恋を失っても、私には家族がいる。子供だって産む。／私は子宮で世界と繋がっているのだ。／そのことは私を安堵させた」という一節もあり、性や恋をはっきりと相対化していく物語の中で、家族は最後まで簡単には

否定されない問題となっています。

ただし後半では、雨音も夫の朔もそれぞれに家族の外でしていた恋が破綻し、恋のない世界である「千葉県」へ引っ越すことで、その家族も解体されていきます。「千葉県」はエデンという実験を行っていて、男も人工子宮をくっつけて子供が産める。人工授精で子供を産んで、産まれた子供を皆「子供ちゃん」と呼んで、共同体全体で育てるというシステムです。男も女もみんなが「お母さん」と呼ばれていて、子供たちはみんな「子供ちゃん」です。

雨音も朔も人工授精で受精卵を体に宿しますが、雨音は流産、朔の子供だけが無事出産されます。朔は「僕は僕の子宮で世界に命を繋げたんだ。素晴らしいことだと思わないかい？」と幸福感に浸り、子供を即センターに預けます。朔はすっかりエデンの思想に同一化していくわけですが、一方で雨音は違和感が捨てられない。

なぜかという、実は雨音はその社会にあっても人工授精を否定して「自然」の生殖を選んだ母の子で、その母親が人間には「本能」があると雨音に語り続けてきたからです。雨音は母を汚いと思いつつも、母から距離がとり切れず、時代の正義になかなか合致していけなくて苦しんでいます。

小説の終わり近くでは、母が雨音を訪ねてきて「千葉」から戻ろうと言いますが、雨音は「この世界で、一緒に、正しく、発狂して」と言って母に何かの薬を飲ませておかしくしてしまいます。そして、はっきりとは書かれていませんが隣の部屋で母を飼う。小説の末部では、雨音は子供ちゃんの一人の小さなペニスを、私の中に入れてみたらどうなるかと興味を持ち、やってみる。なかなかうまくいかないのだけれどそれが身体の中におさまったときには、「快楽はどこにもなく、不可解なほどの安堵感がそこにあった」と語られています。隣の部屋からは母と思われる何者かが発する大きなうめき声、「『ヒト』が動物だったころの鳴き声」が響いて来る。

我々が知っている異性愛的なセックスの光景から遠く離れた小説です。ロマンティッククラブ・イデオロギーを徹底して解体することが試みられています。小説のあちこちで、あざといほどに規範にメスが入れられています。

『殺人出産』もユニークです。十人産んだら一人殺していいという社会の話で、出産は一般の人がすることではなくなっている、そういう社会を描いています。表題に明らかなようにこの小説は、母性イデオロギーを解体する小説です。産むのは「産み人」といわれる人たちです。「産み人」になったら十年間、いえ、途中で流産したりもするので十年以上の時間をかけて十人の子供を産み続けねばなりません。そして十人産んだ暁には、自由に一人の人を殺すことができる。殺される人も社会のシステムを受け入れているので「死に人」に選ばれたら、悲しまずに死んでいく、そういう社会を書いています。

語り手である育子の姉の環は「産み人」です。一方に、育子の同僚でアンチ殺人出産制度の運動をしている早紀子という女性がいます。早紀子は環を制度から救いたいと言いますが、環が選んだのはそういう早紀子に生きづらさを見て、彼女を「死に人」にすることでした。早紀子は抵抗し逃亡しようとしませんが結局はつかまり、環と育子は二人で早紀子を殺します。そして早紀子の身体を割いてみたら、胎児が出て来る。二人は、彼女が抵抗した理由はそこにあったと納得します。そして育子は言います。「『この子の死を私に引き受けさせて。この命の分、私、これから命を産みつづけるわ』／たとえ100年後、この光景が狂気と見なされるとしても、私はこの一瞬の正常な世界の一部になりたい。私は右手の上で転がる胎児を見つめながら、自分の下腹を撫でていた」。育子が胎児を「そっと握り締めると、胎児は手の中で静かに壊れていった」と描かれます。ここでは、制度を狂気とみる視線が確保されながらも、一瞬の正常に身を投じていくことが書かれています。だからといって制度に埋没することが肯定的に示されている小説ではないと私は読んでいます。村田沙耶香は、制度の狂気性を究極まで示してみせている。殺人出産制度が狂気であるように、私たちが信じている制度もまた狂気の一つであるわけです。胎児を握り締めて壊す育子、殺人出産に身を投じる育子にもし違和感を感じるのならば、今この社会の制度にも疑いを持たなければならない。逆に、もし私たちが、今の制度を「正しい」とするのならば、育子を否定することはできないはずです。育子の社会での選択を語りつつ、小説の外の社会にいる私たちに強く問いかけ

てくる小説です。

芥川賞を受賞した『コンビニ人間』もまた家庭イデオロギーをはっきりと問題化した小説だと思われます。主人公の古倉恵子は「普通」に同一化できない人物です。「普通」の文脈が読めないのが、完全にマニュアル化された世界であるコンビニを生き延びる場として選んでいます。恵子は、何もかもが読めないわけではなく、コンビニという限定された場の中であれば、状況を読む事も適切に反応することもできます。繰り返される状況を学習して、何を言っておけば安全なのかを理解しているので、コンビニの中ではその「異物」性を暴かれずに過ごすことができます。そこに、「普通」になれずに凄まじい怒りとコンプレックスを抱いている白羽という男が新しいバイトとして入って来ます。凶暴なほどにネガティブな白羽はコンビニを辞めさせられますが、排除されることに怒った白羽は、結婚して文句を言われたい人生を送りたいと言います。文脈を読まない恵子が、では婚姻しましょうかと提案したことで、白羽は恵子のアパートに転がり込んで来ます。恵子は白羽を「飼い始め」ますが、周囲は一斉におめでとうムードに。恵子は白羽を飼っているだけ。周囲とのずれはどんどん広がり、コンビニも辞めることになって、恵子は気づきます。「気が付いたんです。私は人間である以上にコンビニ人間です」、「誰に許されなくても、私はコンビニ店員なんです。人間の私には、ひょっとしたら白羽さんがいたほうが都合がよくて、家族や友人も安心して、納得するかもしれない。でもコンビニ店員という動物である私にとっては、あなたはまったく必要ないんです」。「ムラの掟」である家庭イデオロギーに、全く同一化できない人物が「コンビニ店員」の姿で描かれているといえます。コンビニが舞台となり、芥川賞の選評などでも、コンビニのマニュアル性を描き出した点に社会批評があるとして評価されていますが、白羽や恵子の「異物」性が結婚や性や家族のイデオロギーから逸脱したときにあぶり出され、きわめて執拗に非難の対象とされるということは、決して見落とすことの出来ないこの小説の特徴になっていると思います。『コンビニ人間』の「普通」は、それ以前の作品が書いてきた「正義」と地続きです。

村田沙耶香の作品は、家族のイデオロギーからあからさまに外れた社会を、単なるディストピアとしてではなく描いています。私たちの世界とは異なる「正常」が設定されていますが、小説の中のマジョリティが持っているその「正常」との関係、つまり、与えられた「正常」を受け入れ疑わないという態度は私たちの世界の光景からずれているものではありません。

しかし同時に、私たちの社会には、こうしたイデオロギーの解体を試みた小説が売れたり、読まれたり、支持されていく土壤があるのだともいえます。既に現実が多様化していて、規範に対する違和感もそここで抱かれています。村田沙耶香が示す世界の強度に圧倒されつつ、そこにある制度を徹底して解体する志向性を支持したいと思います。

感じることと家族

知ることと感じることという枠組みで、家族が保守的な発想のトリガーになり牙城にもなることについて話してきました。家族イデオロギーという話題は、繰り返し論じられてきたものですが、現在においてもさまざまな場において無批判に「普遍化」されていますから、問い直し続けて行く必要があるだろうと思います。親密圏やケアについての思想がありますが、家族のきずなのかわりに、どういう形で人とのつながりをつくり出し得るのか、あるいはどういう形の関係性が、より抑圧的でない流動的な関係となるのかを模索するものだといえるでしょう。

それに加えて考えていかなければならないと思うことは、過去をどうやって受け継ぐかという問題です。というのも、保守的な文脈で家族が出てくるとき、伝統などこれまでの時間との継続性が強調されるからです。家族国家主義の中でも、伝統の継承というのは、大きな柱になります。家族は親密性などの共時的な関係の水準だけでなく、通時的な幻想をつくるための大きな装置にもなっています。過去を、祖先を大事にしようという発想です。これは、おじいちゃんを大事にしたいという発想が歴史修正主義につながるというような危険性を孕んでいます。家族を大事にすることが、非常に一枚岩的な、一本の道筋

で繋がれる我々の共同体を見つけようとしてしまう振る舞いに転化する。家族が私領域に区切られることによって近代家族は成立していますが、それが持つ排他的な閉鎖性が、同心円的に国家の枠組みに重ねられ歴史観にそのまま適用されると非常に危ないことになるわけです。過去を受け継ぐということ、それ自体は非常に重要なことです。記憶の継承は、現在を対象化するために不可欠だからです。継承という文脈で非常にわかりやすい比喩として機能してきた家族を装置から外すとしたら、そのオルタナティブはどうすべきか。あるいは家族という装置を使いつつ、過去の受け継ぎを開かれた行為として、また自己を対象化してする行為とすることは可能なのかどうかということは、私にとって重要な課題として感じられています。

家族は感情を生み出す重要な装置として、検討し続けねばならない対象だと思います。知ることと感じることの間で、感じることをいかに動かしていくのか、現実を知ることに加えて、女性学・ジェンダー学の中で、感じることを構成している枠組みを解体していくことが必要なのではないかと考えています。

注

- 1) 2016年版では、144カ国のうち111位に。